

美濃飛驒ゆかりの

書画会・展観会資料の紹介

坂口 浩之・岩佐 伸一 1

はじめに

江戸時代後期から明治時代にかけての書画を取り巻く特徴的な事象に、書画会と展観会の流行が挙げられる。古くは大坂の文人・木村兼葭堂（一七三六～一八〇二）が、京都大坂の同好者を集めて明和七年（一七七〇）に開催した「書画集会」の例があるが、その起源については諸説があり明らかではない。

安西雲烟『近世名家書画談』では、書画会は同好の士が集って即興制作を楽しむ会、展観会は静かな場所で書画を鑑賞する会としているが、実際には両者混淆した様相を呈していたのが実情である。現在では「展観会」も含んだ意味で「書画会」の語が用いられる傾向が強く、弁別の必要がない場合は本稿もそれに倣うこととする。これらの会の目的は、時代が下るにつれて変化し、絵師や書家が自らの名前を売り、利益を得る場となつたと、上方の文人・田宮仲宣の随想『愚雑俎』中の一条「名目」に記される。実際、曲亭馬琴が開いた書画会では利益が出て、孫のための御家人株購入にあてたことが知られるが、享受者の側からすると、著名な文人や絵師の即興制作が目前で繰り広げられ、作品を鑑賞し、入手できるという絶好の機会であった。主催者は多くの客が祝儀を持って来場し、かつ制作を求め作品と名が広まることを望んで酒食や音曲の提供も行い、そのために酒樓や貸座敷での開催が多く認められる。一方、書画会の名目が、師匠の追善供養などとなると寺院を借りての開催が多い。この場合には飲酒や音曲を伴わず書画を通して故人をしのぶ会もあった（注一）。

このように、様々な名目により開かれた書画会は、三都をはじめ城下町や商業の盛んな町、宿場町や温泉地など全国各地で開催され、文化愛好者の交流の場ともなった。

もちろん美濃でも開催されているが、現在まで関係する資料の紹介や集成はされてこなかった。そこで本稿では筆者が知り得た書画会資料のなかから特に意義や特色のあるものを選び紹介する。本稿が美濃と飛驒地域における書画会研究の端緒となり、かつ江戸時代後期から明治時代において書画を中心とした文学や芸術活動が、身分的にも地域的にも広がりを持っていたことが再認識される機会となれば幸いである。

美濃飛驒書画会の概況

美濃や飛驒ではどのような書画会が開かれていたのだろうか。現時点では表一の通り十四件を挙げることができる。

年代は文政年間から明治時代まで、飛驒での開催は確認できなかったが、美濃では寺院や料理屋が多く使われるという点、他都市と同様の傾向を示す（注二）。岐阜や大垣などの比較的人口が多く、文化活動が盛んな地域での開催は当然だが、久々利や栗原などあまり多くの人口を擁しない場所でも開催されていた点は、周辺地域も含めて文化的な活動が広まっていたことを示すものと言えよう。

開催理由については追善や長寿などの節目を名目にした会もあるが、名披露目的な会が多いようである。三都では定期的な書画会が開催され、有力な流派が競って出品したが、美濃や飛驒では定期的な会の事例は見出すことができなかった。定期的な会はもとより、単発的な会でも、会場の選定、席画を引き受ける著名人への参加呼びかけ、引札や目録の作成など相当量の仕事をこなさねばならず、会主はもとより実働者としての書肆や書画商、表具師などの存在が

なければ定期的な開催は難しい。美濃飛騨ではそのような人物の確実な存在を知らないが、岐阜の書肆文淵堂の名が、時折、書画会引札に見られるのでそのような役割を果たしていた可能性がある。

主催者である会主に注目すると、おおよそ三つに区分される。第一は美濃の人が地元や近隣で開催した会、第二には他国の文人が美濃へ来て開催した会、第三には美濃飛騨の文人や書画家が他国で開催した会が確認できた。第一の例としては表一の1および4・13が該当する。第二の例としては、表一の2が甲斐、同表の3は上毛人の主催になる。第三の例としては、史料三がある。このことから文人達の移動や滞在先での活動が盛んであったことが知られる。また、滞在地における盛況な文化活動に参加する人の存在とそれを支える経済力があつたことも知られるであろう。

また多数の人々の名が、居住地や得意とした技芸、作品名と共に記される書画会の資料は、アマチュアを含めた広範囲にわたる人名録としての役割を見出すことができる。江戸時代後期の美濃では、天保六年（一八三五）に『三野人物考』が刊行され、さまざまな技芸を職業とした九十六人の専門分野、名や号、在所などが記される。これに対して書画会の資料に記される情報は、目録が残っていれば、出品作品、名や号、在所などが記されるが、引札などでは号と在所程度であり、刊本の人名録には及ばない。しかし、史料一や史料二のように、書画会資料からは数多くのアマチュアの文化愛好者が確認できる。このような人々は、おおむね余技として技芸を楽しんだため今に名が残ることは稀ではあるが、それゆえに、彼らの名が記された書画会資料はまたとない格好のものと言えよう。

書画会を確認する手段としては、引札や目録、日記や手紙などの文献類によるところが多く、今回確認した事例も引札によるものが多い。そのような中で、美濃の書画会に関わる絵画があり、これは全国的に見ても珍しいものなので本稿で紹介することとした。また美濃では珍しく目録が残っている例、さらには

飛騨の文人が京都で開催した史料を紹介する。

史料紹介

○史料一 「詩歌連誹琴棋書画茶花会図」

〔天保十一年関善光寺開催書画会〕（注三）（図一、二、三）

所蔵 個人蔵

形状 軸装 紙本木版多色刷 一幅 本紙百三十一・九、二十八・三糎

当該史料は、下部に「名府柏永堂刀／會主甲陽竹雲琳／天保十一庚子孟春於濃／関日吉善光精舍會之」とあり基本事項が確認できる。開催時期は天保十一年（一八四〇）二月であり、場所は関の善光寺、会主は甲斐の「竹雲琳」という人物であり、この資料が名古屋の柏永堂により彫られたことが分かる。

関の善光寺とは通称であり、正しくは妙祐山宗休寺。現在は天台宗の寺院となっている。宝暦年間に再興という形で造営され、寛政十年（一七九八）四月に長野の善光寺の開帳があつた。この縁より善光寺に模した如来堂が完成し、これ以降、関の善光寺との名で呼ばれるようになったという（注四）。先述のように寺院での開催は、他地域でも見られるが、それは出品作品の展示場所や即興制作である席画や席書などの場所、さらには多数の参加者へ振る舞う茶菓や食事の場所が確保できるという点にあつた。この会に関わる他の資料は見いだせなかったが、「詩歌連誹琴棋書画茶花会」という標題からは、鑑賞にとどまらず同好の士が集い即興制作を楽しむという様相が強い。

さて、会主の「竹雲琳」とはどのような人物だったのだろうか。幸いロバート・キャンベル氏による雲琳主催の別の書画会の史料紹介がなされている（注五）。彼は、竹村を姓とした甲斐国甲府の地方文人であり、三十歳代から四十歳代にかけて雲隣、雲麟などと名乗っては、江戸や信濃、美濃、尾張、京都を巡って絵の修業を積んだ。この時に名古屋出身の画家中林竹洞や山本梅逸に

学び、甲府に戻ってからは三陽と号した。先のキャンベル氏による史料紹介は、その改号披露の際に作成された長大な引札を取り上げたものである。彼は「甲府書画会の領袖」とキャンベル氏に言わしめるほど甲府で盛んに書画会を開いていたが、本資料からは修行中の出先でも書画会を開いていた事実が確認できる。すでに甲府にいる時から書画会を手掛けており、その企画や運営には手慣れていたのだろう。

では甲斐から来た文人の誘いに応じたと思われる美濃の人々には誰がいたのかというと、表二に挙げたとおり、本資料には三百七十八名の姿が描かれ、地名や符丁、号が付されている。遊行の文人だけでは、この地域には顔が効かず、多数の人々への呼びかけに難が生じたのであろう。画面中には地名の表示がない者は補助者である旨が記され、六十一人を数えることができる。雲琳は彼ら補助者を仲立ちとしてこの会への参加を呼びかけたに違いない。

さて、参加者の地域を見ると最も多いのは地元関からの参加者で八十八名、次いで岐阜の五十三名、上有知の三十八名、加納の二十名、その他大垣や神戸、結、揖斐など西濃の地名も見える。符丁に目を転じると詩、歌、連誹、琴、棋、書、画、茶、花の九種類に印が付されている。一人の人物でいくつかの技芸を兼ねている者もいるが、詩六十六名、歌四十七名、連誹七十名、琴十八名、棋五十名、書八十一名、画六十三名、茶六十三名、花五十八名となっている。符丁外の蹴鞠や易などの技芸は、その都度矩形内に掲げられるがごくわずかである。人名に注目するとほとんどは現在には名の伝わらぬ人々であり、家業の傍らに技芸や文事を嗜んでいたのだろう。しかし何人かは現在でも名の知られた人がある。たとえば、「大力キ 細香女」は江馬細香、「コウト 杏村」は高橋杏村、「上ウチ 藤城」は村瀬藤城、「上ウチ 秋水」は村瀬秋水などである。このように職業文人と在郷の文化愛好者が会して交流する場があったこと、また家業の傍ら様々な技芸を嗜む人々が数多くいたことが推察される資料としても貴重である。

○史料二 『展観今書画目録』

所蔵	個人蔵
形状	刊本 袋綴 木版単色刷 一冊 縦十三・九、横十・〇糎
表紙	前表紙（白色無地）
題僉	中央書題僉「新書畫展観録」（子持ち枠）
表紙	原表紙（白色無地）
題僉	左肩摺題僉「展観今書画目録」
見返し	白地（墨書「展観今書画目」）
丁数	二十一丁
丁付	本文目録柱に「〇 一（十六）」
構成	前表紙（二丁）、原表紙（半丁）、序文（二丁）、本文目録（十六丁） （注六）、原裏表紙（半丁）、裏表紙（二丁）

美濃における書画会は先述の通り十件以上を確認したが、目録の確認できた会は、現在ではこの一件にとどまる。目録が残っていると、おおむねこの誰がどのような作品を出品したかが明らかになり、会主との交友関係やその地域での文芸のレベル、また出品者の伝歴を知る有用な資料となる。

本資料に関わる書画会の基礎的な条項は次のとおりである。

日時	安政五年（一八五八）三月十五日
場所	大垣□泉亭
会主	大藪 渡辺春水
会幹	大垣・菱田海鳴、古宮・川瀬老峰、中郷・願正寺秋堂、大藪・善明 寺南箕、楡俣・棚橋鶴斎
補助	京・頼立斎、江戸・細川林斎、大坂・山形荷雪、美濃・村瀬秋水、 高橋杏村、安楽寺霞山、山田訥斎、森杏溪

本稿記載例として、美濃の冒頭部分を挙げる。

草書五絶

大垣 津田清淮

墨竹

全 大屋氏秀女

会主の渡辺春水については、在所が大藪と記されており、現在の輪之内町大藪に住まっていた人物と思われるが詳細は不明である（注七）。本会は、西は肥前、東は江戸までの広範囲にわたる出品者を得ており、会主はもとより、会幹、補助の活動が活発であったことに起因すると思われる。会主、会幹、補助を除いた出品は次の通り。京師三十二人三十二点、江戸十三人十三点、大坂四十四人四十五点、泉州四人四点、尾州四人八点、勢州二十四人二十六点、丹州一人一点、紀州一人一点、肥前一人一点、三州二人二点、予州一人一点、信州一人一点、播州一人一点、長州一人一点、越中一人一点、越前一人一点、江州四人四点、美濃七十六人九十点、合計二百十三人、二百三十二点。

さらに、美濃からの出品者（会主など主催者側を除く）の地域分布を詳細に見ると次の通りとなる。大垣二十一名、高須四名、笠松七名、佐波一名、今尾二名、上有知三名、下有知二名、美江寺一名、神戸三名、赤坂一名、草道島三名、北方一名、高田四名、江吉良三名、飯柄二名、蜂尻一名、兼山一名、小倉一名、呂久一名、本郷一名、落合一名、十六一名、垂井一名、大跡一名、東野一名、桐野一名、下川辺一名、山寄一名、駒野一名、只越一名、勝村一名、五反郷一名、楡俣一名。これからすると美濃においても会主地元的美濃西部からの出品が多いことが分かる。

さて、他国では伊勢が多いのは有力な知己の存在や地縁血縁の可能性がある。大坂が多いのは補助が活躍した故か、または出品者のひとりに安八出身で大坂で活躍した儒者の後藤松陰がおり、積極的にかかわった結果などと考えられる。頼山陽門下の頼立斎や村瀬秋水らは京都には知己が多かっただろう。よって京都からの出品数が多いのもうなずける。三都の内では江戸からの出品が少ないのは細川林斎の熱の入れ具合か、京都大坂に比べてやや遠いことなどが考えられる。これに対して近い割には出品者が少ない尾張には春水の知己や組織化で

きる人がいなかったと思われる。このようなところからは、会主は文芸を職業とせず、在郷において文芸を好む人であったと推測できるだろう。

この目録からは、書画会の機構を垣間見ることができる。このような大規模な会の開催には、会主一人ではなく、それらを補佐する「会幹」、「補助」の存在が必要であったことである。会幹を見てみると、漢詩人としても名高かった大垣の菱田海鷗をはじめ、比較的会主在地の近隣の人々が名を連ね、会主を直接補佐して動いた人物ではないかと推測できる。これに対して補助に名の挙がる人々は、三都や美濃のうちでも大藪からは少し離れた場、例えば村瀬秋水は上有知、高橋杏村は神戸、山田訥齋は笠松などが居所として挙がり、彼らは各自の居住する近く、または知己への参加を呼びかける役割を持っていたのであろう。

目録は京都の出品者からはじまり、冒頭は「淡彩鯉圖 絹 越前守岸岱」とあり、丹波介岸誠、貫名菰翁、日根対山など画家や書家を職業としていた著名な人物が続く。江戸では藤森弘庵や高久隆古、大槻盤溪、大坂では田能村小虎、西山芳園、完瑛、後藤松陰らの名が見える。

この資料も、美濃に限ってみれば史料一と同じように在郷の人々が余技として文芸に興じていた様子が分かり、かつ三都の著名な絵師や書家の出品を得ている点からは、美濃の一文芸愛好者が持っていたネットワークの一端を知ることができる資料と言えよう。

○史料三 引札「鐵翁和尚追薦書画展観会」（図四）

所蔵 岐阜県博物館（後藤玄吉氏寄贈）

形状 一枚摺 紙本木版単色刷 一枚 縦二十八・九、横三十六・八糎
翻刻

癸酉十月十五日不論晴雨八時開筵四時撤會 京都 木邨鍊蕉
鐵翁和尚追薦書画展観会 主 飛騨 加藤素毛

先師鍊翁和尚以善画鳴天下久矣棄世已及三歲君輩受教之渥山高海深惟其人琴俱止烏兔易過每一思之感情曷已欲報厚恩無物可致泉下乃相共謀以謂不若以其所好供之靈前於是卜地於圓山左阿彌為追薦會展觀其遺墨及古書画以慰其靈伏冀四方君子本日命駕携其珍藏書画及自「(虫損判読不可)」作來會聊烹苦茗以消半日之餘閒不亦快乎若不吝貴臨不獨先師含笑於地下在吾輩亦與有榮若有事故不果來者送致書画會後必謹元璧不敢遲延

京都	江馬天江	尾張	平野泥江	西京寺町姉小路角	鳩居堂
同	前田暢堂	肥後	佐々布篁石	同押小路柳馬場東	萬成堂
補同	山田棟東	豊後	後藤領田	同寺町二条下	懷玉堂
浪華	田能村小虎	同	淵野桂憐	大阪心斎橋筋平野丁	播磨屋吉平
長崎	守山湘帆	東京	服部波山	長崎石灰丁	京井梅嘯
助同	中邑陸舟	同	赤松香雨	所名古屋本町五丁目	東壁堂
美濃	村瀬秋水	飛驒	平田雲岳	東京横山町肴棚	扇面亭傳四郎
同	同雪峽	美濃	西村竹仙	美濃岐阜本町	斧屋甚兵衛

逸雲老人航海仙去既数年矣余等嘗在長崎屢受其教故今欲並展遺墨慰其靈亦聊報其恩也 木邨鉄蕉 加藤素毛

これまでは、美濃において開かれた書画会資料を紹介したが、本資料は飛驒出身の加藤素毛（一八二五〜一八七九）が会主となって、京都で開いた会の

引札である（注八）。

本会の基礎的な条項は、次のとおりである。

開催年月日	明治六年（一八七三）十月十五日
場所	京都 円山左阿弥
会主	木村鉄蕉、加藤素毛
名目	鉄翁和尚追善書画展観会

まず開催の目的は、幕末から明治にかけて活躍した長崎の文人画家鉄翁和尚（一七九一〜一八七一）追善のために開催されたことが分かる。末尾には同じく長崎の文人画家木下逸雲の追善も合わせて行いう旨が付記されている。会主は素毛と木村鉄蕉（一八三八〜一八七六）の名が挙がる。素毛は、飛驒国益田郡下原村の大名主加藤家の次男として生まれた。代々文雅の家系であり、素毛も俳句、和歌、絵画を嗜み、嘉永年間、高山に出て飛驒郡代小野高福（山岡鉄舟の父）の公用人となった。その頃関西、九州地方を旅し、著名な文士と交歓した。嘉永六年には長崎で鉄翁に絵を学んでいる。安政二年（一八五五）、江戸へ上り、万延元年（一八六〇）一月、幕府の遣米使節に随方として随行。米国から大西洋を横断して世界一周し、九月に帰国した。素毛は各地で洋行談を行い、絶賛を博したという。その後は詩歌俳諧をたのしみ、遊歴の日々を送った。鉄蕉は鉄翁の門人と思われるが詳伝は知らず、京都の画家で明治九年に三十九歳で亡くなったことを知るのみである（注九）。

開催地は、京都円山にあった貸座敷の左阿弥であり、京都での書画会が多数開催された場所である。安養寺六坊のひとつである長寿院にあった座敷であるが、眺望や庭園が良かったため様々な集会に用いられた。

この書画会では、鉄翁の遺墨や古書画の展示を行うとしているが、さらに参加者には珍藏の書画や自ら筆を執った作品を携えてくるように要請し、その返却には万全を期すことを約束している。実際には「集所」として京都の筆墨商鳩居堂をはじめ、名古屋の書肆東壁堂、書画斡旋者の扇面亭などの商賈が名

を連ねており、事前にそこへ届けておくようになっていたようだ。京都、大阪、長崎、名古屋、東京、美濃と広範囲に在する集所が挙がっている点からは、相当大規模な書画会であったのではないかと考えられる。

補助には東は東京から西は長崎まで、現在でも名が残っている絵師の名前が記されているが、鉄翁門下が中心になったというよりは、三都をはじめ、拠点となる地域において名のある文人画家に賛助を得た雰囲気強く感じられる。

会主の鉄蕉がどの程度著名な人物だったかはわからないが、全国を遊歴した素毛が持っていた文人間のネットワークも相当に役立ったものと推測される。またそのようなネットワークを持った人物であるからこそ、会を主催できたのかもしれない。

おわりに

以上、美濃飛騨に関わりを持つ書画会資料を紹介した。資料の形態では軸装の絵画、冊子体目録、引札とそれぞれに異なった形態を示し、得られる情報もさまざまである。今後はさらに数多くの事例や資料の集成を重ねることによって、江戸時代後期から明治時代にかけて書画を取り巻いた特徴的な事象である書画会の様相が明らかになる。それからは、都市や在郷の文化状況、在郷の文化愛好者と都市や遠方との職業的文人との交流などを知ることができ、当地における幅広い文化的様相が分かることだろう。

注

(注一) 広瀬旭荘『日間瑣事備忘』記載の弘化四年(一八四七)九月一四日条の田能村竹田十三回忌追善展観(於、大坂・浄国寺)など。

(注二) 全国的な事例は古田亮「日本の美術展覧会 その起源と発達」(東京国立博物館『MUSEUM』五四四号、一九九六年)、大阪での事例は岩佐伸一「大坂における書画会と展観会について」(大阪歴史博物館『大阪歴史博物館研究紀要』

第四号、二〇〇五年)、名古屋での事例は「尾張名古屋における書画会について」

(早稲田大学美術史学会『美術史研究』第三六冊、一九九八年)を参照のこと。

(注三) (一) 内の名称は筆者付与による。

(注四) 関市教育委員会編『新修関市史』通史編 近世・近代・現代、一九九九年による。

(注五) ロバートⅡキャンベル「観照のながれ 書画会四席その三・甲府一蓮寺改号書画会」(『文学』八巻第四号、一九九七年、岩波書店)

(注六) 十六丁裏欠損

(注七) 『輪之内町史』(輪之内町、一九八一年)によれば、大藪の大庄屋に渡辺家があり、分家筋のものは寺小屋を営んでいたと記される。詳細は不明だが、会主の春水はこの一統の可能性もあろう。

(注八) 本会の引札については、熊原政男『加藤素毛略伝』二二頁(加藤素毛先生顕彰会、一九六一年)にもその存在が記されている。

(注九) 荒木矩『大日本書畫名家大鑑』伝記下編、二七五四頁(復刻版、一九七五年、第一書房)。

末尾になりましたが、資料の閲覧や紹介にご配慮いただいた所蔵者の方々に御礼申し上げます。

なお本稿は平成二十年度科学研究費補助金(若手研究(B))による研究「京都・大坂における書画会データベースの構築と絵画史的意義の考察」(課題番号19720038研究代表者岩佐伸一)の成果の一部である。

表一 幕末明治の美濃における書画会一覧

	和暦	月	日	西暦	場所	場所・詳細	名 称	会主など	形態	所蔵、出典など
1	文政7年	3	10	1824	美濃 養老	千歳楼	〔養老山菊水建碑展観会〕	菊泉水谷直方	引札	名古屋市博物館
2	天保11年	2		1840	美濃 関	日吉善光精舎	詩歌連誹琴棋書画茶花会	竹雲琳	摺物	個人
3	天保11年	3	26	1840	美濃 岐阜	善證寺	〔会主萱斎□□書画会〕	萱斎□□	引札	名古屋市博物館
4	天保11年	8	21	1840	美濃 岐阜	善證寺	〔会主青楓正種展観書画会〕	十一歳童子 青楓正種	引札	名古屋市博物館
5	弘化3年	4	28	1846	美濃 久々利	長保寺	詩歌連俳書画会	泳鳳	引札	名古屋市博物館
6	嘉永6年	3	5	1853	美濃 栗原	清水寺	〔会主鶴山書画展観会〕	鶴山	引札	個人
7	嘉永6年	11	15	1853	美濃 大垣	小原鉄心別荘 菱田海鷗宅見山樓	〔会主小原鉄心書画会〕	小原鉄心、菱田海鷗	文献	岡千仞『在臆話記』第3集第3巻
8	安政5年	3	15	1858	美濃 大垣	大垣 □泉亭	〔会主渡辺春水新書画展観〕	渡辺春水	目録	個人
9	文久元年	9		1861	美濃 大垣	全昌寺 竹島町酔月堂	〔会主菱田海鷗書画大会〕	菱田海鷗	文献	『輪之内町史』(202頁、輪之内町、1981年)
10	文久2年	9	9	1862	美濃 養老	千歳楼	新書画及詩歌連俳展観	秋堂积穎、南陽片野震	引札	名古屋市博物館
11	明治力	4	16		美濃 養老	千歳楼	〔会主高橋松洞書画会〕	高橋松洞	引札	名古屋市博物館
12		3	5		美濃 養老	千歳楼	〔会主寿山寿筵書画会〕	百歳翁寿山	引札	名古屋市博物館
13		3	29		美濃 岐阜	常在寺	新書画観会	岐阜常在寺大年院日椿	引札	名古屋市博物館
14		9	13		美濃 神戸	神戸御坊	〔先師魯堂道人追善展観書画会〕	流天無閑	引札	名古屋市博物館

注1 場所、会主などは原資料記載の通りを原則としたが、一部改変した箇所もある。

注2 名称において〔 〕内の名称は筆者付与による。

注3 不明の事項は空欄とし、判読不能の文字は□にて示した。

表二 「詩歌連俳琴棋書画茶花会図」〔天保十一年関善光寺開催書画会〕掲載者一覧

番号	分野	記載地名	氏名	備考
1	書	セキ	蘆葦庵	
2	詩	(なし)	黙斎	補助
3	書	セキ	龜遊	
4	詩、歌	(なし)	梟岡山人	補助
5	書	ハチマン	洞泉寺	
6	画、俳	ニシヨリ	蘭逸	
7	詩	上ウチ	雲栖	
8	詩、歌、書	上ウチ	潮音	
9	俳、茶	タカトミ	有隣	
10	歌	(なし)	徳瑞	補助
11	詩、茶	タカトミ	蘭齋	
12	詩、俳、書、棋	タカダ	旭窓	
13	詩、俳、書、画	シマタ	夕里	
14	俳、画	ニシヨリ	都堂	
15	画	マツモリ	古崑堂	
16	俳、花	タカトミ	其楽	
17	書	セキ	数馬	
18	詩、棋	上ウチ	河清江	
19	詩、画	上ウチ	藍水	
20	書	セキ	狸々主人	
21	詩	カノウ	益齋	
22	歌	上ウチ	河内郷	
23	詩	(なし)	龍金	補助
24	書	上ウチ	榮枝堂	
25	詩、棋、書、画	セキ	修拙	
26	茶、画	セキ	樸月軒	
27	画	カサマツ	米山	
28	詩、書	カノウ	日華	
29	書	(なし)	竹内	補助
30	書	キフ	松柏軒	
31	歌	カノウ	鷹橋	
32	詩、書	カノウ	蘭陵	
33	歌、茶	(なし)	蔵六庵	補助
34	歌	上ウチ	儀稲	
35	(なし)	キフ	勝三	
36	詩、書	イヒ	弄山	
37	詩、歌	セキ	千春	
38	歌	上ウチ	千春	
39	花	キフ	矢 儀助	
40	俳	古イチハ	鸚兆	
41	茶、花	セキ	一有	
42	俳、花	ハチヤ	酒向	
43	画	カサマツ	春樵	
44	書	カイ上	立仙	
45	詩	カノウ	攸齋	
46	歌、茶	上ウチ	魏守	
47	俳	オセ	白髪	

番号	分野	記載地名	氏名	備考
48	歌、書	オセ	恩柳庵	
49	詩、書、画	大カキ	細香女	
50	詩、画	(なし)	登貴女	補助
51	詩、書	カノウ	東海	
52	書	(なし)	恵庵	補助
53	歌	上ウチ	政平	
54	書	上ウチ	英徳	
55	花、俳	オセ	良英	
56	詩、歌	(なし)	龍住	補助
57	花	キフ	服部	
58	花	オヤタ	岩松窟	
59	花	オヤタ	溪岸窟	
60	詩	カノウ	脩齋	
61	書	セキ	慎吾	
62	花、俳	オセ	魚印	
63	花	カノウ	文齋	
64	歌	上ウチ	清久	
65	詩、書	キフ	清浄堂	
66	画、茶	ハチマン	立田	
67	花	オヤタ	楓錦齋	
68	俳、茶	セキ	騎睡	
69	詩、茶	カシタ	龍福寺	
70	茶	(なし)	岑彦	補助
71	画、茶	アハノ	松月庵	
72	歌	上ウチ	勝之	
73	歌、茶	カシタ	今正溪	
74	茶	コシノシ	藤井	
75	茶、花	(なし)	證道	補助
76	俳	イモシヤ	壽重	
77	詩、書、画	(なし)	荷昭	補助
78	書	別フ	老洲	
79	画	キフ	稲山	
80	詩、書、画	コウト	杏村	
81	書、茶	オヨヒ	海陽	
82	茶	キフ	木葉庵	
83	茶	キフ	伊藤	
84	書	セキ	勝見	
85	花	オヤタ	幸般亭	
86	歌	ミソノ	古村	
87	書	(なし)	久世女	補助
88	詩	上ウチ	倉山	
89	書、茶	(なし)	無一庵	補助
90	茶	キフ	竹葉庵	
91	花	キフ	桃李軒	
92	花	キフ	翠竹堂	
93	画	上ウチ	雲基	
94	花	(なし)	蘿月菴	補助

番号	分野	記載地名	氏名	備考
95	(なし)	白カネ	補三應	
96	花	キフ	松壽軒	
97	画	上ウチ	藍涯	
98	茶	上ウチ	古竹庵	
99	花	タカトミ	法橋三花水齋	
100	歌、茶	キフ	山田	
101	花	キフ	奇風菴	
102	茶	キフ	古田	
103	茶	キフ	太田	
104	茶	キフ	金鳳堂	
105	花	キフ	八施亭	
106	琴、茶	セキ	政女	
107	花	キフ	夢寐軒	
108	花	キフ	水月齋	
109	花	キフ	量孝	
110	琴	ミノ	飯尾	
111	詩、書	ヒラカ	微齋	
112	画、花	セキ	玉扇	
113	花	キフ	縁之	
114	茶	キフ	小寫亭	
115	棋	セキ	治右エ門	
116	将棋	カハヘ	矢鳥	
117	琴	キフ	柳女	
118	琴	キフ	榮女	
119	琴	キフ	歌女	
120	俳	カトヤ	理風	
121	琴	セキ	美奈女	
122	書	セキ	足立	
123	俳	セキ	大澤	
124	詩、書	ヤマカタ	春阿	
125	詩、書	キフ	桂涯	
126	歌	セキ	梵朝	
127	俳	カノウ	巴釣	
128	茶	(なし)	禪鶴	補助
129	花、茶	セキ	山源四郎	
130	詩、茶	セキ	執中舎	
131	花、茶	セキ	田壽	
132	歌、俳	セキ	東水	
133	歌	セキ	幸雄	
134	書、俳	タカトミ	師古齋	
135	俳	セキ	徳女	
136	俳	ウヌマ	宗朝	
137	俳	ウヌマ	柳意	
138	棋	アシシ	加小三郎	
139	茶	ナルミ	森山	
140	棋、俳	セキ	上宮次郎	
141	画、俳、茶	大カキ	桃枝	

番号	分野	記載地名	氏名	備考
142	歌、茶	キフ	梅園	
143	詩、画、歌	スマタ	俊男	
144	俳	ウヌマ	露竹	
145	俳、茶	(なし)	披雲	補助
146	棋、花	セキ	方矩	
147	棋	神ト	田半左エ門	
148	棋	キフ	普賢寺	
149	棋	キフ	桑善八	
150	棋	大カキ	川鷹之助	
151	俳	ウヌマ	叟由	
152	歌	(なし)	了圓	補助
153	書	セキ	白益	
154	俳	キフ	鶯語亭	
155	詩、茶	(なし)	梧渾	補助
156	棋	アシロ	加小忠太	
157	茶、画	(なし)	知恵女	補助
158	棋	神ト	杵千代三郎	
159	書	コノシマ	藤司馬	
160	棋	キフ	出佐左エ門	
161	詩、棋	上ウチ	田中	
162	棋	キフ	中藤兵衛	
163	詩、書	(なし)	光国寺古主	補助
164	歌	ノリタケ	青甫	
165	詩	カノウ	紹亭	
166	詩	カノウ	東山	
167	書	キフ	承方	
168	詩	キフ	樅園	
169	画、俳	(なし)	夜月	補助
170	画、花	キフ	米澤	
171	詩、書、茶	(なし)	柯菴	補助
172	書	キフ	半江	
173	茶	(なし)	実道	補助
174	画	カノウ	崔山	
175	詩	カノウ	東皐	
176	茶	カシタ	平井	
177	俳、棋	タカトミ	文枝	
178	画	(なし)	月庭	補助
179	俳、茶	タカトミ	恭齋	
180	詩	コンノシマ	水湖	
181	書	アハノ	歸一	
182	書	(なし)	崔秋	補助
183	詩	キフ	秋涛	
184	詩、書	(なし)	断機女	補助
185	詩、書	キフ	笠菴	
186	茶	セキ	石直右エ門	
187	易	セキ	笑顔	
188	茶	セキ	信親	
189	茶	キフ	淳齋	

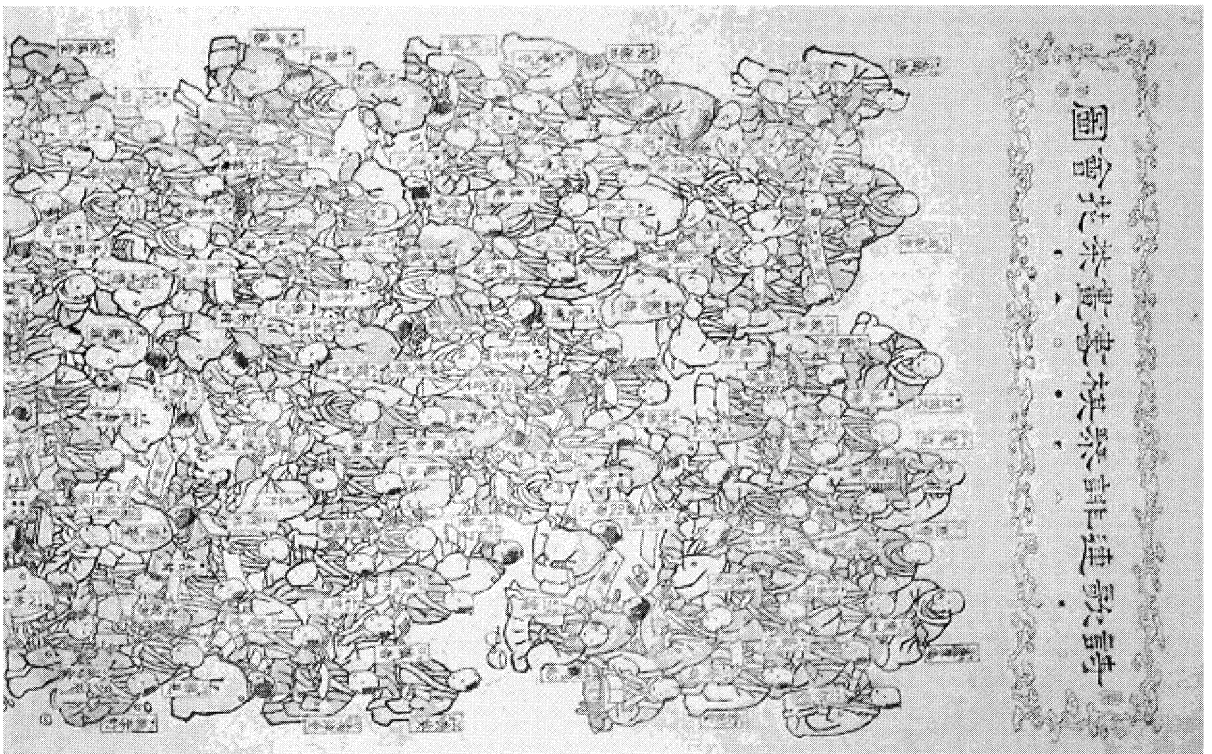
番号	分野	記載地名	氏名	備考
190	茶	セキ	春園	
191	棋、俳、歌	キリトウシ	樹仙	
192	茶	カサマツ	山崇有	
193	画	キフ	煙江	
194	棋	セキ	伏屋	
195	茶	キフ	河寄	
196	茶、花	セキ	盛征	
197	書、茶	キフ	丹岸	
198	俳	(なし)	雙竹	補助
199	書	セキ	児鼎	
200	俳、花	セキ	由仁	
201	茶	セキ	秋山	
202	棋	キフ	平松	
203	茶、琴	セキ	道安	
204	俳	カノウ	波焚	
205	歌	キフ	嘉言	
206	書	ミフ	武漢	
207	詩、書、棋	下ウチ	武松	
208	画	下ウチ	天千秋	
209	将キ	セキ	志ト	
210	歌、棋、書、茶	セキ	臨呪	
211	棋	オセ	足太次郎	
212	蹴鞠、茶	カノウ	榎堂庵	
213	棋	上ウチ	岡常三郎	
214	画	(なし)	梅塙	補助
215	画	ミハ	西塙	
216	俳、画	ナカラ	米甫	
217	棋	下ウチ	密蔵坊	
218	棋	ナミキ	江策十郎	
219	棋	上ウチ	遠金右エ門	
220	棋	上ウチ	河惣三郎	
221	棋	カノウ	組治右エ門	
222	花	白カ子	月哉	
223	花	白カ子	桃僊	
224	棋	上ウチ	遠吉六	
225	花	ノラチ	安田	
226	棋	キフ	満願寺	
227	棋	セキ	蘭子	
228	画	セキ	後藤	
229	俳	センコウシ	梅洲	
230	書、俳	セキ	玉葉軒	
231	花	セキ	桂子	
232	花	小ノ	佐藤	
233	花	クラチ	山田	
234	花	セキ	西村	
235	花	セキ	一笑	
236	花	セキ	鹿友	
237	棋、書	上ウチ	羽觴	

番号	分野	記載地名	氏名	備考
238	棋	キノ	蓮正寺	
239	俳	結	士游	
240	歌	オセ	佐永	
241	歌、俳	(なし)	田丸屋	補助
242	花	セキ	栄昌堂	
243	花	セキ	河次郎助	
244	花	ウヌマ	司ト	
245	花	上ウチ	漫亭	
246	棋、書	オセ	知足亭	
247	俳	セキ	雪光	
248	詩、書、画	山カタ	梅應	
249	棋	セキ	松濤	
250	将キ	セキ	河合	
251	書	山カタ	一應	
252	書	(なし)	満壽	補助
253	書	セキ	維賢	
254	茶	フチエ	運生	
255	花、歌、茶	セキ	直伴	
256	詩、茶	セキ	耕翁	
257	花	クラチ	桂月	
258	画、花、俳	大タ	里英	
259	画	キフ	三駄	
260	歌	オセ	利弓	
261	琴、画	(なし)	古有女	補助
262	歌、画	(なし)	加賀女	補助
263	詩	セキ	松溪	
264	茶、俳	(なし)	南畝	補助
265	画	木タムラ	鳳齋	
266	俳	クラチ	大龍寺	
267	詩、書	セキ	晩成	
268	詩	(なし)	脩竹齋	補助
269	茶	(なし)	西勝	補助
270	詩、書	セキ	祐弁	
271	書、画	上ウチ	雲亭	
272	歌	オセ	拙葉	
273	書、俳	サイコウ	梅枝	
274	琴	カハテ	為忠	
275	花、書	セキ	山晴	
276	詩	(なし)	最勝	補助
277	俳、茶	(なし)	一武	補助
278	画、俳	(なし)	田貴女	補助
279	歌	キフ	水東伯	
280	詩、書	上ウチ	海岳	
281	歌	(なし)	賢順	補助
282	書	セキ	杵弥次兵衛	
283	琴	(なし)	廣松女	補助
284	琴	セキ	富女	
285	琴	(なし)	菊枝女	補助

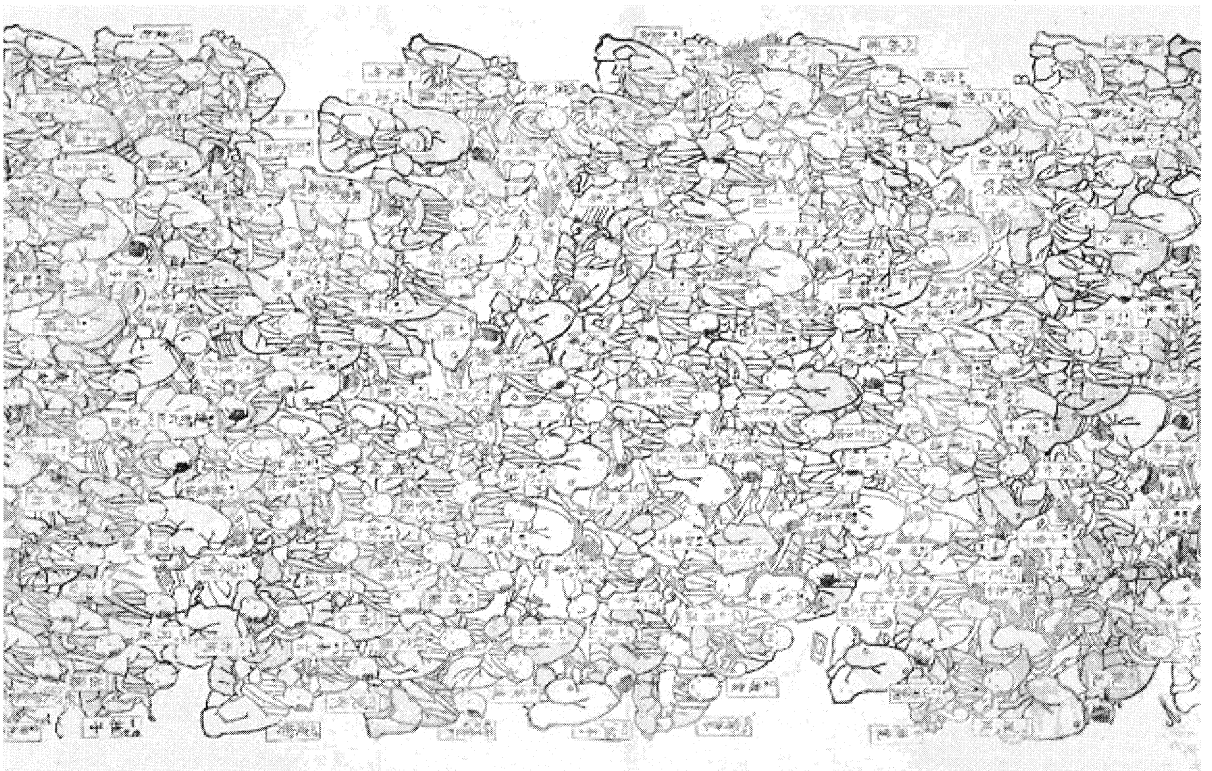
番号	分野	記載地名	氏名	備考
286	琴	コンシマ	藤井	
287	詩、歌	(なし)	是真	補助
288	詩、歌	(なし)	泰禪	補助
289	詩、歌	(なし)	亮雅	補助
290	書	キフ	堤利平	
291	俳、画	ニシキオリ	鈴木猛	
292	詩、茶	上ウチ	知常	
293	画	上ウチ	源土峯	
294	画	上ウチ	尋州	
295	棋	下ウチ	後宗右衛門	
296	俳	マサタ	鱗化	
297	歌	(なし)	竹内	補助
298	詩、書	セキ	水東	
299	詩、書	セキ	緑天	
300	樂	セキ	華鱗堂	
301	俳	セキ	政女	
302	詩、書	上ウチ	詢向	
303	棋	上ウチ	池治兵衛	
304	棋	キフ	稲村	
305	棋	上ウチ	河多左エ門	
306	琴	(なし)	茂枝女	補助
307	棋、花	セキ	常政	
308	俳	十四条	完古	
309	琴、画	(なし)	志与有女	補助
310	詩	(なし)	習齋	補助
311	(なし)	カノウ	中尾	
312	棋	キフ	花一平	
313	棋	下ウチ	後政助	
314	棋	上ウチ	河利助	
315	棋	上ウチ	酒伊左エ門	
316	歌	下ウチ	種蒔	
317	詩、書	上ウチ	藤城	
318	書	ナカラ	崔英	
319	書、花	セキ	桑夫	
320	棋	上ウチ	遠左右エ門	
321	詩、棋	上ウチ	小宗十郎	
322	画	(なし)	豊雪	補助
323	詩、画	上ウチ	秋水	
324	画	セキ	玉水	
325	書	ナカラ	崔止	
326	俳	(なし)	竹窓	補助
327	歌、棋	下ウチ	無知也	
328	歌、棋	下ウチ	実則	
329	書	アハノ	文溪	
330	俳、画	セキ	巴桂	
331	俳	キフ	奚華坊	
332	俳	(なし)	宗樹	補助
333	俳	(なし)	眠山	補助

番号	分野	記載地名	氏名	備考
334	茶、書	セキ	長瀬	
335	書	(なし)	愛有	補助
336	詩	セキ	便同	
337	俳	大カキ	其兆	
338	歌、詩	下ウチ	左久良	
339	俳	大タ	里竺	
340	書	(なし)	恵洞	補助
341	画	イエシ	柳田	
342	琴、画	(なし)	汁以女	補助
343	画、書	(なし)	波頼女	補助
344	(なし)	大タ	卓三	
345	俳	大タ	芦邦	
346	俳	セキ	為彦	
347	俳	タンノシマ	喜川	
348	画	キフ	詩琴	
349	書	ナカラ	崔泉	
350	(なし)	大カキ	文駒	
351	(なし)	大タ	他山	
352	花	カノウ	都里	
353	俳	セキ	春坡	
354	書	セキ	寂嶺	
355	俳、茶、花	セキ	蓬村	
356	俳	大タ	由壽	
357	歌、画	(なし)	農富女	補助
358	俳	カノウ	枝陽	
359	俳、歌	カノウ	永雅	
360	俳	(なし)	泉紫	補助
361	画	セキ	子為	
362	茶	セキ	鴻盤堂	
363	俳、画	(なし)	天谷	補助
364	茶、画	セキ	嬾林	
365	書	セキ	喜美女	
366	花	セキ	長谷喜	
367	俳、画	セキ	自樂	
368	花	セキ	喜明	
369	画、俳	アリ	花香	
370	画	上ウチ	類壽汁	
371	詩	セキ	文會堂	
372	画	(なし)	譽臼	補助
373	画	セキ	鉄亭	
374	俳	セキ	寛尔	
375	画、花	セキ	鉄彌	
376	書	セキ	小寫	
377	茶	セキ	松坪	
378	画	セキ	天鷄	

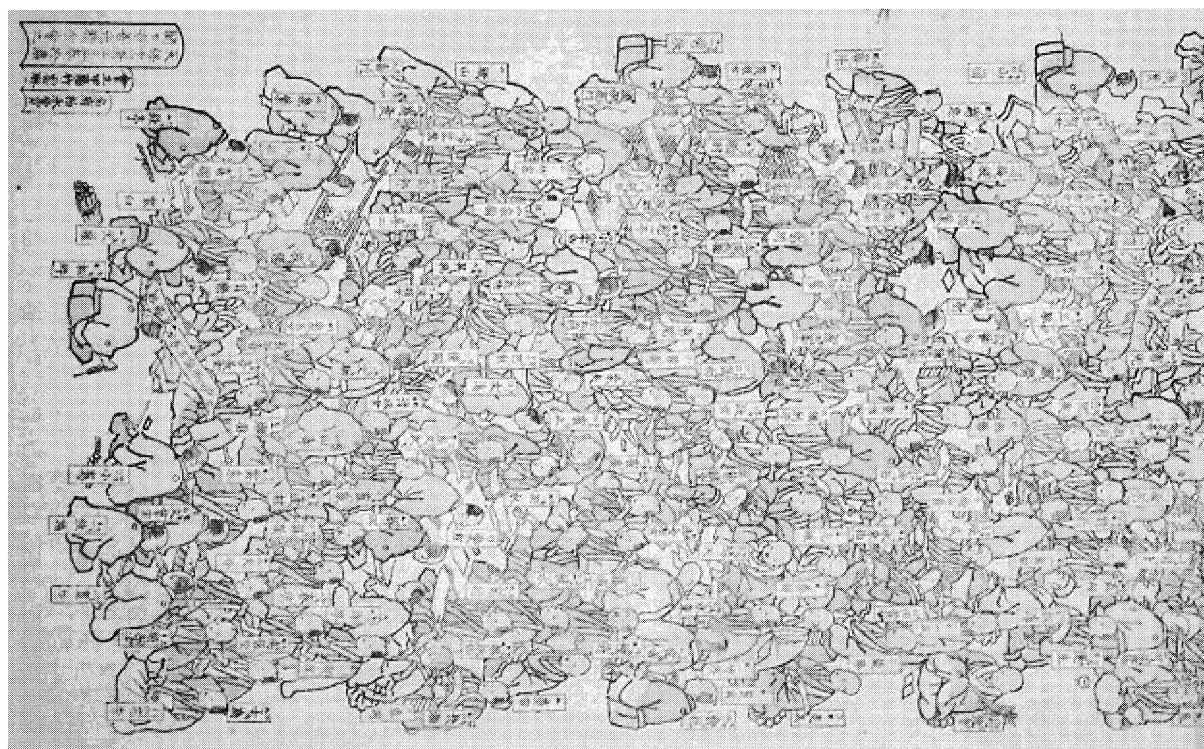
- 注1 番号は資料上部より適宜付与した。
 注2 分野において各人に付与されている符丁は読み替えて文字に置き換えた。
 注3 記載地名、氏名は資料記載の通りに転記したが、用字などは適宜変更した。



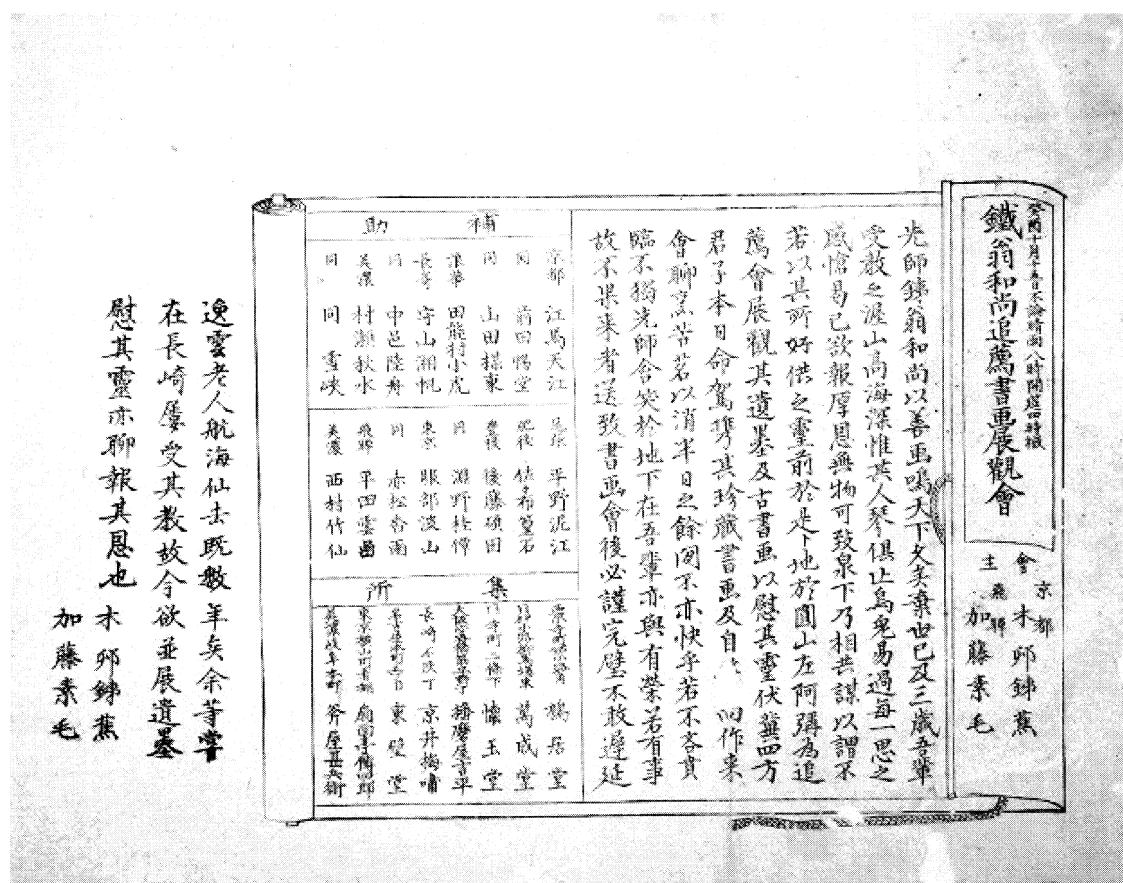
図一 「詩歌連誹琴棋書画茶花会図」〔天保十一年閏善光寺開催書画会〕（上端部）



図二 「詩歌連誹琴棋書画茶花会図」〔天保十一年閏善光寺開催書画会〕（中央部）



図三 「詩歌連誹琴棋書画茶花会図」〔天保十一年関善光寺開催書画会〕（下端部）



図四 引札「鐵翁和尚追薦書画展觀會」